

漢文と漢字に対する意識の相関関係および 漢字学習ストラテジー

藤本 陽子

キーワード：漢文嫌悪、漢字嫌悪、漢文漢字相関関係、漢字学習ストラテジー

【要 旨】 平成17年度の国立教育政策研究所教育課程研究センターの調査で明らかになった漢文嫌いの結果をもとに、特に漢字との関係に焦点を当て当時の学習指導要領下で漢文を学習した現役大学生に調査することでその原因の調査を行った。結果として、漢文に対する意識が変わった者も若干おり、それは漢字が読めるようになったこと、また教員の資質によるものであることが明らかになった一方で、漢文嫌いは大学生になっても多く、またその原因は漢文訓読の難解さと、漢字単体に対しては苦手意識や嫌悪感はないものの漢字に対する負の意識等によることが確認された。詳細を調査すると漢字で困難なのは書きであり、困難を覚える者の多くが「何度も書く」および「自然に覚える」方法を採用していた。漢字学習として有効な方法を探るべく学習者の漢字学習のストラテジーを検証した結果、漢字が得意である者は一般的に行われている「何度も書く」ことで漢字を覚える方法ではなく、漢字を分解して覚える方法を採用していることが明らかとなった。一方漢字の読みについては多くが困難を感じてはいないものの、実際に未知の漢字の読みを旁から推測できた者は半数のみで他は自分の知っている似た形の漢字と混同している。漢字を分解することで漢字を覚えることが容易になり、また音読みも手がかりをつかめるようになるであろう。また未知の漢字について自ら調べるといった姿勢を学習者は漢字の得手不得手あるいは好悪に関係なく持っており、その際彼らの利用するツールは電子辞書をはじめ、インターネット、スマートフォンのアプリといった電子ツールであり、印刷媒体はほとんど使われていないことが明らかになった。

1. はじめに

平成17年度に国立教育政策研究所教育課程研究センターによって高等学校教育課程実施状況調査が行われ、平成19年にその結果が発表された。この調査は平成11年告示の高等学校学習指導要領に基づいた教育課程の各教科の実施・実現状況について調査したものである。

この調査において、生徒29,759人に対して漢文に関する質問が「国語総合」のなかで行われているが、「漢文は好きだ」という質問に対して「そう思う」(8.9%)、「どちらかといえばそう思う」(15.9%)が合計して24.8%であるのに対し、「どちらかといえばそう思わない」(20.9%)、「そう思わない」(50.3%)という否定的な意見が合計で71.2%にも上った。

この結果について向嶋(2012)は、「難しい漢字ばかりが並んだ文章にまず嫌気が差したり、返り点や送り仮名にしたがって訓読することに煩わしさを感じたり、助字や再読文字などを覚えることにうんざりしたりすることが多分にあるだろう」と推測している。実際この調査では他に漢文に関して「漢文訓読の仕方を理解すること」という質問を生徒に行っており、「よく分かった」(24.2%)、「よく分からなかった」(31.5%)、「好きだった」(20.9%)「嫌いだった」(43.8%)、

「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」(19.9%)、「役に立つと思わなかった」(37.3%)といずれも漢文訓読に対して否定的な意見の数値が肯定的な意見のそれより高くなっている。なかでも「きらいだった」という回答のパーセンテージが一番高く、漢文訓読が漢文嫌いの要因となっていることが明らかとなっている。

本稿では、漢文への否定的な意識を再確認したうえで漢文訓読を含め向嶋が指摘した漢文嫌いのその他の要因特に、向嶋の言う「難しい漢字ばかりが並んだ文章」が原因であろうという漢字への意識との相関関係について、旧学習指導要領の下で漢文を学習した現大学生に調査した結果を基に検証考察する。目的としては漢文嫌いの原因を探ることで、どのような対策がとれるかを提言するためである。その際、もちろん「下手の横好き」もあるかもしれないが、漢文・漢文学習について「好きこそもの上手なれ」という観点から漢文嫌いには次のような要因があるという仮説に基づいて調査を行っている。

- 漢文の内容理解度が低い
- 漢文学習で分からない事柄がある
- 漢文学習の動機が消極的である
- 漢字に対する嫌悪感がある
- 漢文が好きになるためには上記仮説が逆転すれば可能である

特に漢字への意識との相関関係に着目するのは、漢字が嫌いであることが原因で漢文が嫌いになるのであれば、日本で就学期の始めから学習している子どもたちが漢文教育が始まる前の段階で漢文嫌いになるからである。また、学齢期途中に来日した特に非漢字圏の子どもたちが漢字学習で困難を覚えれば漢文嫌いになる可能性が高いと考えるからである。もし漢字に対する負の感情がなければ、漢文教育の開始時期には漢文嫌いは存在しないことになる。そのため漢字自体への意識、好悪、得手不得手、学習ストラテジーについても調査を併せて行った。

2. 調査概略

2014年6月～2015年7月に首都圏および中国地方にある大学の大学生男女99名に対し選択式および記述式アンケートを実施した。うち1名は中国人留学生と考えられる回答だったため、質問によっては調査結果からは除いている。

3. 調査結果

3-1. 漢文が好きか嫌いか

現代文、古文、漢文の国語の3つの分野から好きなものを選択（複数回答可）する調査を行った。回答数は70で現代文が67、古文が13、漢文は3となった。うち1つの回答は漢文を学習したことがないと回答し別の1つの回答は先述のとおり留学生（漢字圏）と推測される。この2名についてはそれぞれ現代文のみあるいは、現代文と古文を選択しており、2名を除いたとしても漢文が好まれていないことは明らかである。国立教育政策研究所教育課程研究センターの結果の、古文の方が若干漢文より厭われていたという結果とは異なるものであり¹、その理由として同センターはそれぞれについて好きか嫌いかを問うていたのに対し、本調査では選択する方式を採っ

たからということが考えられる。そのことは次の結果からも明らかである。

今回の調査ではさらにセンター同様の「漢文が好きか」という質問を改めて行っている。漢文に対する意識（好悪）の要因を検証しさらに漢文が好きになる要因あるいはきっかけを明らかにするため、選択肢としては「ずっと嫌い」「昔は好きだった」「どちらでもない」「昔は好きだった」「ずっと好き」を挙げた。「勉強をしたことがない」2名を除いた97名の結果は次のようになっている。

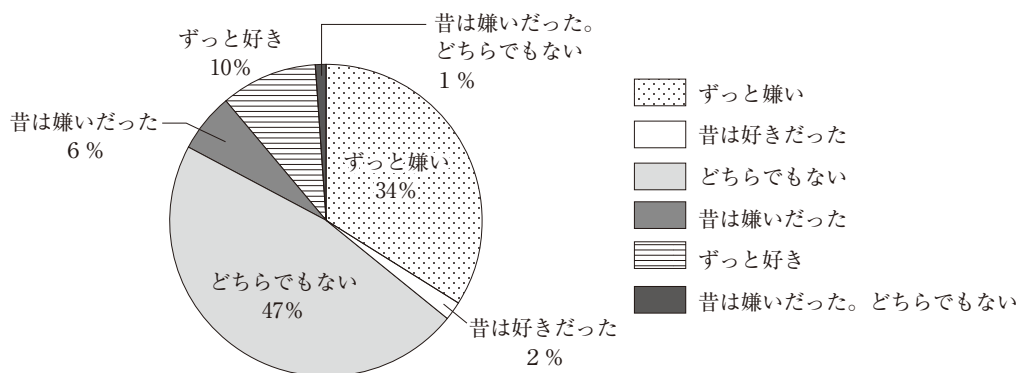


図1 「あなたは漢文が好きですか」

先に述べた国語の3分野（現代文、古文、漢文）から選択した結果と上の図1で漢文の好き嫌いの数が異なっている。漢文が「ずっと好き」あるいは「昔は嫌いだった」を漢文に対して肯定的なグループとすれば、それらを合わせて16人の16%となり最初の質問よりは漢文に対して肯定的な意識を持っている者は5倍ほどになっている。それでも一番多いのは「どちらでもない」でほぼ半数の45人で48%を占めており、残り半数については「ずっと嫌い」および「昔は好きだった」（現在は嫌い）を合計した35名（34%）の「漢文が嫌い」が、「ずっと好き」および「昔は嫌いだった」（現在は好き）の16名（16%）の約2倍多い。センターの調査の数字ほどではないが、大学生になっても漢文が好まれていないことが確認された。漢文への記憶をよみがえらせるために、過去に読んだ漢文のタイトルあるいは内容を問う質問をしたが、一部大学の授業で学習した回答者を除き、「竹取物語」、「つついづつ」（ママ）、「山月記」という回答があり、漢文の定義が曖昧な回答者もいるようである。

3-2. 漢文が好きになった時期ときっかけ及び漢文が嫌いになった時期ときっかけ

漢文に対する意識が学習期間の途中で変わったと答えた者は「好きだった」が2名、「嫌いだった」が7名の合わせて9名で全体の1割ほどしかいない。しかし「嫌い」から嫌いではなくなった者の方が多いのは特筆すべきである。意識が変わったその時期ときっかけについて嫌いではなくなった集団からの具体的な回答は2名からしか得られなかったが、そのうち1名が「大学3年生になって面白い先生と出会えた」と回答、もう1名は「難しい漢字が読めるようになってから」と回答している。前者から考えられることは中等教育でたとえ漢文が嫌いになったとしてもその

後意識が変わる可能性があることを示唆しているものといえよう。丁（2011）は「（前略）教師自身の漢文に対する意識を高める必要を感じている。（中略）教師の指導が不十分なら、生徒たちが漢文の学習に意欲的に取り組むことが困難である。漢文を学ぶ生徒たちは、教師の姿勢によって大きく影響されている。（中略）教師が漢文という教科の特質を認識し、身につけなければならない知識の修得に努めるべきである」と漢文を教育する教員の漢文に対する姿勢と資質の重要性について指摘している。「難しい漢字が読めるようになってから」という後者については向嶋が指摘したように漢字が漢文学習の意識に影響があることを示唆しているものと言えるが、それについては追って検証する。

漢文が嫌いになった者については、1名が「高校になって覚えなないといけない内容が増え授業についていけなくなった」こと、もう1名が「中学生までは好き」で「分からなくなった」と答えている。2名とも嫌いになった時期は高校であり難易度が上がったことで漢文が嫌いになったことが分かる。

3-3. 漢文に対する感想

次に掲げるのは、漢文学習者が漢文を読んでどのような感想を抱いたかである。漢文を勉強したことがないと回答した2名を除いた97名の回答であるが、漢文のジャンルによって感想が異なることも考えられるため複数回答可としており延べ回答数になっている。

感想として最も多いのは「漢文独特の読み方が難しかった」というもので全体のおよそ4割弱にも上っている。これは先述のセンターが行った「漢文訓読の仕方を理解すること」に対する負の意見と重なっている。詳細を見ると漢文が好きだと答えた者でこの項目を選択した者はごくわずかである。このことから漢文独特の読み方の難しさは、漢文好きには問題とはならないことが分かる。同様に「読みにくいと思った」も漢文好きに比べそうでない者の割合が高く、漢文に対する感想は「読みにくさ」にあると考えられる。一方で「ストーリーや内容が面白かった」という正の感想の合計は多くそのなかでの漢文好きの割合は高い（半数以上）が、漢文好きでない者の3割弱も正の感想を挙げており、「内容が面白くなかった」を挙げる漢文嫌いの数と比較しても漢文読解の技術的な難しさとは別に、教材自体に魅力があることは考慮されるべきであろう。記憶に残っているものをジャンル別に挙げるように（タイトルが思い出せない場合は内容を書くように）指示した質問では、「山月記」や「臥薪嘗胆」を漢詩として、「李白とかのやつ」（ママ）を論語として回答するなど混乱が見られた。記憶による回答であるためかもしれないし、ジャンルを意識して学習していなかったのかもしれない。或いは、内容を覚えていればジャンルは分かったかもしれないがタイトルしか覚えていなかったのかもしれない。いずれにしてもこの回答は、記憶の正誤に関わらず回答者が想定している漢文に対する感想である。記憶に残っているものとして挙げられたものは他に「矛盾」、「臥薪嘗胆」、「魚夫の利」（ママ）、「我竜てんせい？」（ママ）、「春望」、「蛇足」、「長恨歌」、「伍子胥列伝」、「千里を走る馬の話」、「すいこう」（ママ）、「孔子の作品で15歳からの人生を知っている話」、「人虎伝」、「王昭君」、「子曰くで始まっていた二三編」、「春秋」、「嫁を募集して、来た女は実は妖怪だった」、「黄河の話」、「螢雪の光」（ママ）、「77が出てくるやつ」、「愛は藍より出でて藍より青し」（ママ）、春暁全文ををほぼひらがなで表記し

たものなどであった。中学で学習したものと高校で学習したものと多岐にわたっている。最後にこれはあくまで記憶に残っているものであり、漢文の好き嫌いに関係なく記憶に残っているものなのでどの教材が魅力的だったのかは不明であることを付け加えておく。

漢文好きが選択しなかった項目あるいは選択数が非常に少なかった項目は、「内容が面白くなかった」、「読むのが苦痛だった」、「文法が難しかった」、「古文が苦手なので古文のような仮名遣いが分からなかった」、「漢字が現在使っている漢字と違うので書くのが難しかった」という技術

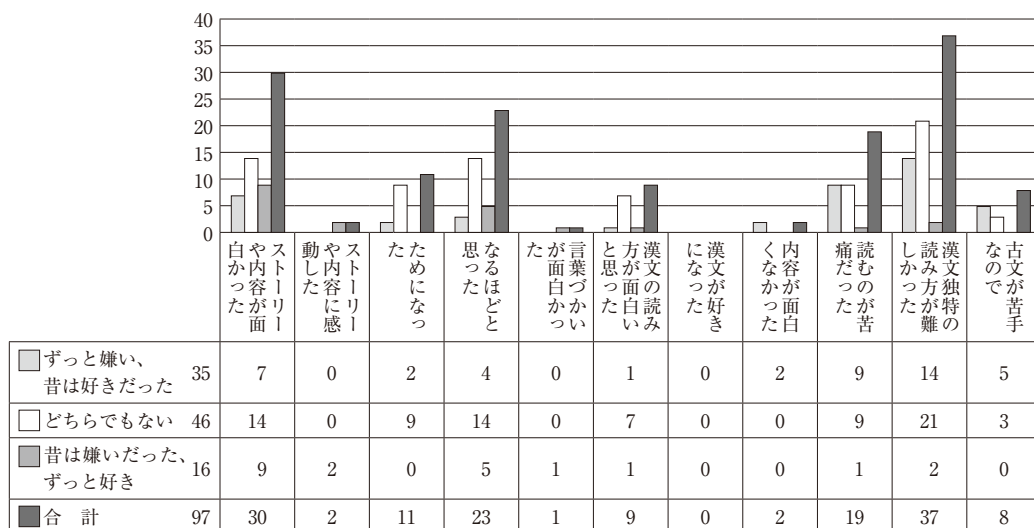


図2 「漢文を読んだ感想」 1

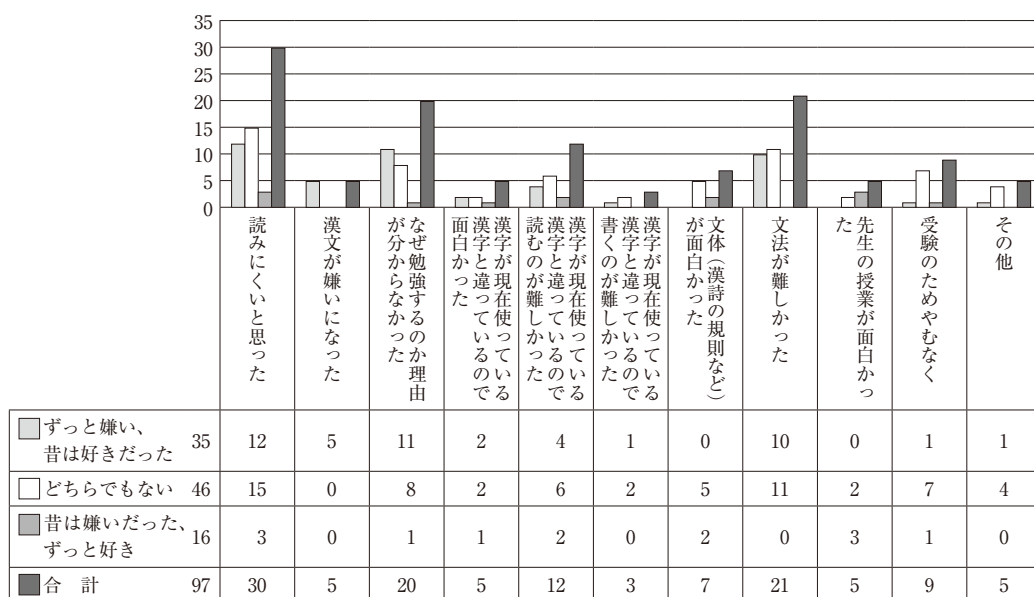


図3 「漢文を読んだ感想」 2

的な苦手意識と負の感想、そして「ためになった」である。一方漢文が好きではない者は、漢文を学習する理由が分からない、あるいは受験のためのやむを得ないという消極的な学習姿勢であり、概して漢文に対して負または消極的な感想を持っている。このことから漢文が好きな者が抱いたストーリーや内容の面白さ、ストーリーや内容への感動、納得、漢文の独自性に対する興味など積極的な感想と対照的な感想を、漢文嫌いは抱いていることが分かる。

漢文嫌いを漢文好きに変えるには、上記の負または消極的な感想あるいはイメージをいかに正または積極的なものに変えられるかが鍵となろう。実際の学習面において動機付け、技術面で文法（古文を含む）、表記法の基礎的な知識の獲得が必要となるであろう。

3-4. 漢文の内容理解

次に、漢文の内容理解と漢文への意識の関係を見ることにする。内容理解について97名のうち92名の回答が得られた。選択肢は5つで「よく分かった」、「まあよく分かった」、「あまり分からなかった」、「まったく分からなかった」、「覚えていない」。このうち、「よく分かった」

漢文の内容理解と漢文に対する意識	「よく分かった」	「まあよく分かった」	「あまり分からなかった」	「まったく分からなかった」	「覚えていない」
「よく分かった」	4	28	7		
「まあよく分かった」	21	8	3		
「あまり分からなかった」	1	0	1		
「まったく分からなかった」	5	9	1		

漢文が「ずっと嫌い」あるいは「昔は好きだった」と答えた者32名のうち内容があまり分からなかったと回答したのは21名と65%になっている。「覚えていない」を除いて計算すると80%弱となる。「どちらでもない」、あるいは「昔は嫌いだった」・「ずっと好き」とでは、「まあよく分かった」の割合が高く、漢文嫌いに内容がよく理解できないことが関係しているようである。漢文好きに分類される者たちのなかにも「分からなかった」あるいは「まったく分からなかった」が存在するが、彼らは内容理解ができなくても漢文好きである。分布を見ると、漢文が嫌いなグループでは「あまり分からなかった」が多く、どちらでもない、ずっと好きは「まあよく分かった」が中心となっている。内容理解の度合いに関係なくある意味無条件とも言える漢文好きというわずかな例を除けば、漢文の内容理解と漢文の好き嫌いは相関関係があると言える。次に内容理解で壁となるものについて回答者の漢文の要因

漢文の内容理解に関する質問	「あまり分からなかった」	「まあよく分かった」	「よく分かった」	「覚えていない」
「漢文の内容理解と漢文の好き嫌いは相関関係があるか」と回答した者に「漢文の内容理解と漢文の好き嫌いは相関関係があるか」と回答した者が何か「書き下し文」、「漢文訓読」、「返り点」、「漢字」、「その他」の選択肢から複数回答を求めた。結果は次の表の通りである。	10	12	7	10

「その他」は0であったため表には掲載しなかった。前項3-3の漢文に対する感想同様、漢文の読みに関する項目が一番多くなり、「書き下し文」と「漢字」はその次となった。なお全部

と回答した者1名分は全ての数に加えてある。

この数字から漢文が「ずっと嫌い」で「あまり分からなかった」と「ずっと嫌い」で「まったく分からなかった」を抽出すると次のようになる。昔は漢文が好きだった者2名は内容理解についてあまりあるいはまったく分からなかった。

	書き下し文	漢文訓読	近い点	漢字
ずっと嫌い、あまり分からなかった	6	8	4	7
ずっと嫌い、まったく分からなかった	0	0	0	1
合計	6	8	4	8

全体としては漢文理解のなかで漢文訓読の困難さが主要因となっていたが、漢文嫌いの間では漢字が漢文訓読と同じ数字となっている。内容理解に占める漢字の役割は小さくないと言えるだろう。そこで次項では漢字に対する意識を探る。

3-5. 漢字に対する意識

漢字に対する意識については、「漢字は好きか」、また漢字の要素それぞれの得手不得手について明らかにするために「漢字を書くのは得意か」「漢字を読むのは得意か」「漢字の読みを覚えるのは得意か」「漢字の形を覚えるのは得意か」の項目で質問をした。

まず、漢字に対する好悪について行った「漢字は好きか」という質問に対する回答から取り上げる。「ずっと好き」「得意で好き」「得意ではないけれど好き」「昔は嫌いだった」「昔は好きだった」「ずっと嫌い」「得意だけれど嫌い」「得意ではないから嫌い」「どちらでもない」を選択肢とした。回答数は95で内訳は次のようになる。

突出して一番多かったのは「得意ではないけれど好き」で43（約45%）、その次は「どちらでもない」17（約18%）、「ずっと好き」14（約15%）、「得意で好き」13（約14%）が続く。漢字が嫌いだというのは全体で6しかなく1%にも満たない。一方で70%ほどの者が得手不得手に関係なく漢字自体を好んでいることが分かる。

漢文との関係では、「漢文がずっと嫌い」「昔は好きだった」と回答した者の漢字に関する内訳を見ると回答数35のうち、「ずっと好き」6、「得意で好き」5、「得意ではないけれど好き」12の合わせて23が漢字が好きであると回答しており、「どちらでもない」が6で、無回答が2、漢字が「ずっと嫌い」「得意ではないから嫌い」合わせて4だった。全体ではわずか6だった漢字の内訳が「ずっと嫌い」・「得意ではないから嫌い」のうちの3分の2の「漢文がずっと嫌い」の回答者であったことが分かる。前項で取り上げたように漢文嫌いのグループが内容理解の困難さの要因として漢字を挙げていながら漢字そのものに対する嫌悪感をもつ者が少ないことから、漢字嫌いが漢文嫌いの主要な原因にはならないが、漢文嫌いの一因になることが推測される。

比較対象として「漢文がずっと好き」あるいは「昔は嫌いだった」と回答した16名の漢字に対する意識を取り上げると「ずっと好き」が5、「得意で好き」が3、「昔は嫌いだった」が1、「得意ではないけれど好き」が6、「どちらでもない」が1となっており漢字が嫌いなものはいない。漢文が好きであるために「漢字が嫌いではないこと」も条件になると言えよう。

次に、漢文理解と漢字の関係を確認する。前項の漢文の内容理解が困難だった理由として漢字

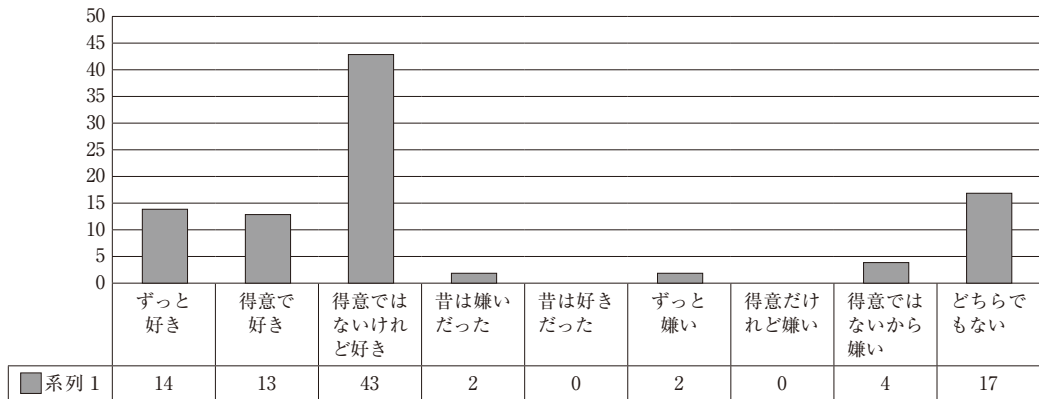


図4 漢字に対する意識 (全体)

を挙げたもの9名について個別に取り上げると次の組み合わせになる。

「あまり分からなかった」-「漢字」-「ずっと (漢字が) 嫌い」1名、「あまり分からなかった」-「漢字」-「得意ではないから嫌い」2名、「あまり分からなかった」-「漢字 (全て)」-「どちらでもない」1名、「まったく分からなかった」-「漢字」-「得意ではないけれど好き」1名、「あまり分からなかった」-「漢字」-「得意ではないけれど好き」2名、「あまり分からなかった」-「漢字」-「得意で好き」1名となっている。さらに、「覚えていない」-「漢字」-「得意で好き」1名となっており、以上のことから、漢文における漢字と一般的な漢字に対して学習者が別の意識を持っていることが推測される。その違いが漢文で使用される漢字のどこにあるのか、旧字体であるのか、読み方の多様さか、意味の多様さか、使い方かその他なのかは今回調査しなかった。

3-6. 漢字の書きと読み

次に、漢字の書きと読みについて取り上げる。書きについては「漢字を書くのは得意か」という質問をし、「得意」(辞書を引いたり人に聞いたりしなくても思うように書ける)、「比較的得意」

表4 漢文に対する意識、内容理解、漢字、漢字に対する意識

漢文が好きか	漢文の内容理解	漢文で分からなかったもの	漢字は好きか
ずっと嫌い	あまり分からなかった	漢字	ずっと嫌い
ずっと嫌い	あまり分からなかった	漢字	得意ではないから嫌い
ずっと嫌い	あまり分からなかった	漢字	得意ではないから嫌い
ずっと嫌い	あまり分からなかった	全て	どちらでもない
ずっと嫌い	まったく分からなかった	漢字	得意ではないけれど好き
ずっと嫌い	あまり分からなかった	漢字	得意ではないけれど好き
ずっと嫌い	あまり分からなかった	漢字	得意ではないけれど好き
ずっと嫌い	覚えていない	漢字	得意で好き
ずっと嫌い	あまり分からなかった	漢字	得意で好き

(辞書を引いたり人に聞いたりすることもあるが、漢字を使って書くことは苦にならない)、「あまり得意ではない」(できればひらがなで書きたい)、「得意ではない」(できるだけひらがなで書きたい)の4つの選択肢と、さらに同音異義語の判別ができるかを問う「スマートフォン、携帯、パソコンの自動変換で出てくる漢字から適切なものが選べる／選ぶのに自信がない」という選択肢を組み合わせた。また書く前の段階として形を覚えることについても質問した。読みについては「漢字を読むのが得意か」という質問をし、選択肢は書き同様の4つとし、さらに読みを覚えることについても質問した。

漢文嫌いとの関係を明らかにするために漢文嫌いと回答した者35名の回答を抽出した結果、次のようになった。数字の右側の割合は、それぞれの項目における「得意」「比較的得意」「あまり得意ではない」「得意ではない」の割合を示したものである。但し合計数については、無回答があるため35になっていない。

表6を見て分かるとおり、漢字の読みに比べて書きが不得意であり²、さらに形を覚えるのが不得手である。同音の漢字から適切な漢字を選ぶことについては漢字の得手不得手で分かれた。選べないと答えた者はわずかであったが、一覧から選べないということは漢字そのものもつ意味を理解し、リストにある漢字の違いが判別できていないからであろう。漢字学習のうえで、意味と結びつけて覚えていくことがこのような学習者には必要であろう。

3-7. 漢字を書くための記憶

では、漢字の形をどのように覚えているのであろうか。漢字の形を覚えるのが得意である者としてでない者ではストラテジーが異なるのであろうか。このことを調査するために、「漢字をバラバラにして覚える(朝=十+日+十+月)」、「パーツに分ける(偏と旁)」、「何度も書く」、「習字で習う」、「本、新聞、電車の広告など漢字が使われているもの読んでいて自然に形を覚える」、「その他」の選択肢を設け複数回答可とした。この質問については漢文嫌いと直接関係はないため、全体の回答を挙げる。まず、「漢字を書くのは得意か」という問に対する全体99名(留学生

表5 漢文が嫌いと回答した者の漢字の読み書きに対する得手不得手

	漢字を書くのが		漢字の形を覚えるのが		漢字を読むのが		漢字の読みを覚えるのが	
得意	0	0%	1	3%	6	20%	6	19%
比較的得意	20	65%	14	45%	23	77%	16	52%
あまり得意ではない	10	32%	12	39%	0	0%	8	26%
得意ではない	1	3%	4	13%	1	3%	1	3%

表6 漢字の書きに対する得手不得手と同音異義語の選択

同音異義語が	漢字を書くのが得意	漢字を書くのが比較的得意	漢字を書くのがあまり得意ではない	漢字を書くのが得意ではない
適切に選べる	0	15	4	0
選べる自信がない	0	0	2	1

(を含む)のうち回答した者が95名で次のようになっている。8

回答数	95
得意	8
比較的得意	46
あまり得意ではない	33
得意ではない	6

表7の漢字の得手不得手を漢字の覚え方で分けたものが次の表8である。先述のとおり複数回答であるので、延べ数となっている。

その他という回答はなかったため掲載していない。数字の右側の%は、得手不得手4段階の母数が異なることから、それぞれの選択肢において比較するために示したものである。複数回答なので5つの選択肢の割合ではなくそれぞれが得手不得手内全人数に対してどれぐらいの割合かを示している。母数は表7にある数字である。「漢字の形を覚えるのが得意」と回答した学習者が最も多く用いるストラテジーは「自然に覚える」、「パーツに分ける」であり、「得意ではない」と回答した学習者が最も多く用いるストラテジーは「何度も書く」、次に「自然に覚える」であることが分かる。「何度も書く」という回答数が全体的には最も多い³にも関わらず、漢字の形を覚えるのが得意と回答したなかでは主要な方法ではない。漢字を解体して覚えるという方法を探るという回答は、漢字の形を覚えるのが得意と答えたなかに多く、逆に漢字の形を覚えるのが「得意」と答えた者以外には非常に少ないことから、ここで推測できるのは、漢字を覚えるのが得意な者は漢字をパーツに分けて覚えることで「何度も書く」という必要性がないのではないかということである。一方漢字を覚えるのが得意ではない回答者は、漢字を解体することなくひたすら何度も書いて覚えようとしているのではないかということである。漢字の形を覚えるのが得意ではない学習者たちが漢字力を上げ、苦手意識を克服するにあたって、漢字を解体して記憶する方法は検討しても良いストラテジーではないだろうか。一方「自然に覚える」という回答は全体的にある。これは幼少期記憶能力の高く文字に興味を持ちだす時期には非常に有効な方法だが⁴、学年が上がるに従い複雑化する漢字を覚えるのに、単なる「自然に覚える」方法がいつまで年齢的に有効なのかは精査する必要がある。さらに「あまり得意ではない」・「得意ではない」と回答した者も用いていることから、その有効性、どの程度自然に覚えているのか、どの程度正確に覚えているのか、漢字に曝されている時間、量、質、対象となっているメディアなどについても精査する必要がある⁵。

表8 漢字の形の覚え方

漢字の形を覚えるのが	バラバラ		パーツ		何度も書く		習字	自然に	
得意	1	13%	4	50%	2	25%	0	4	50%
比較的得意	3	7%	4	9%	29	63%	0	18	39%
あまり得意ではない	3	9%	2	6%	18	55%	0	15	45%
得意ではない	0	0%	1	17%	3	50%	0	2	33%
合計	7		11		52		0	39	

3-8. 漢字の読みと字義

ここでは漢字の読みと漢文の読みおよび簡易な記憶の得意不得手と漢字の読みと漢文の読みと漢文の読みの関係を取り上げたが、漢文の読みにおいて全体では次の漢字の読みを覚えている数字の右側の割合は、表5同様それぞれの得意の項目で「得意」「比較的得意」「得意あまり得意ではない」「得意ではない」の総数に対する割合

得意の項目	得意	比較的得意	得意あまり得意ではない	得意ではない	
比較的得意	66	74%	比較的得意	48	52%
あまり得意ではない	6	7%	あまり得意ではない	21	23%
得意ではない	1	1%	得意ではない	2	2%
回答数	89		回答数	92	

全体と漢文嫌いとして漢字の読みに対する意識を比べるとほぼ変わりはないが、全体では漢文嫌いにはいなかった「漢字を読むのがあまり得意ではない」という回答者が若干いる。漢字を読むのが得意ではないと回答した者が漢文嫌いにもいる1名であることから、漢文に対して負の意識を持っている回答者と異なり、漢文に対して負の意識を持っていない回答者の漢字の読みのレベルは「あまり得意ではない」レベルであることが分かる。

漢字を読むのが得意あるいは比較的得意と回答した者が90%以上占めるが、では初めて見る漢字に対してどのように読みと字義を推測するのだろうか。それを調査するために、パーツに分けられるので推測が可能な漢字「澗」（カン…山の中の川）と一画しかなく推測が難しい「ゝ」（チュウ…「燈火のじつととまって燃えた姿を描いた象形文字」⁶⁾）について記述式で回答を求めた。

「澗」について99名のうちの回答数は75名で最も多かった回答が「じゅん」または「うるおう」で35、その次が「かん」で32、そのほか「うるう」、「あわい」、「せん」、「しゅん」、「たに」、「もん」だった。読みを推測した理由について、「じゅん」と回答した者は「似た漢字がある」、「澗に似ているから」、「見たことがあるから」、「見たまま、直感」、「人の名前」、「つくりから見て」、「お笑いの名倉潤が思いついたから」と回答しているが、自分の既知の「澗」という文字から推測、あるいはそのものだと思っている者が多い。一方「かん」と答えた者のうち2名は調べたと回答し、また1名もおそらく調べたと推測される回答、もう1名は知っていたという回答であったが、隣の部分の「間」を見て「かん」と判断したと回答した数は25だった。そのほか熱燗の「燗」だという回答が3あり、「かん」と読めても別の字と勘違いしている者もいた。つまり傍を詳細に見て読みを推測する者は半数もいなかったということである。

字義については「じゅん」あるいは「うるおう」と回答した者は字義をそのまま「澗」と捉えている者がほとんどだが、中には「間」を認識して「水と水の間」と回答した者もいた。一方「かん」と回答した者はさんずいから水に関係するものであると想像している。他に「と間」と両方から「水に関係するもので水で削られた穴」を想像し「とどろく」、「水がかわくまでの時間」、水の間ということから「何かを遮る」、「邪魔をする」などがあつた。「燗」と勘違いしていた者は「ドリンクメニューで見て知った」と答えている。

「ゝ」については1名が読み方を知っていたと回答し、もう1名が読み方を調べたと回答している。回答数は少なく37で、未知の文字であること、推測する手がかりがないことから諦めて回答数が減ったものと思われる。読みの回答としては「てん」、「ちょん」、「句読点」、「繰り返し」、

「これ」、「しめ」、「の」、「ペン」、「おどりじ」、「おろす」、「よごれ」、「ほく・ぱく」、「すい」、「くね」が挙げられているが最も多かったのは「てん」であった。「てん」は句読点や一休みの意味として捉えており、「の」はカタカナの「ノ」と似ているからという回答で助詞として、「おろす」は「右上からおりてくる」ので「荷物などを近くに置く」、「ペン」は「もうひといき」の意味でその理由は、浦などの右上の点を書くときにつけるかつけないかで迷うからということであった。手がかりが少ないだけに想像力をたくましくする者と見たままで記号のように捉える者と二極化した。

「潤」にしても「い」にしても読みを調べた者はいたが、意味まで調べた者は1名しかいなかったことを付け加えておく。未知の文字に遭遇したときにどう対処するかについては3-9で述べる。

では、漢字の読みはどのように覚えているのだろうか。漢字の記憶の仕方について、「音読みは旁から推測して覚える」、「自然に覚える」、「その他」を選択肢として用意し、複数回答可で回答をもとめた。延べの回答数であり、また無回答者もいる。結果は次のようになった。

まず回答数であるが、漢字の書きに比べて回答数がどれも少ない。漢字の書きについては回答しても、漢字の読みについて回答しなかった者が多かったからである。これは漢字の読みの学習が意識的に行われていないため選択しなかったものと推測される。

数字に隣接する右側の割合は、読みを覚えるのが得意かどうかという間に回答した全体数92(表8)の「読みを覚えるのが」の合計で左側の数字を割ったものである。つまり、全体数92から見るとどれくらいなのかを表している。これを見ると漢字の形を覚えるのに使われている漢字を解体することで手がかりとする戦略は読みではほとんど使われていないことが分かる。

また、その隣の割合は、漢字の音読みを覚えるのが「得意」以下「得意ではない」と回答したそれぞれ的人数で割ったものである。「あまり得意ではない」の回答者で読みの覚え方について回答した者が少ないので割合としては低くなっているが、概して自然に覚えると回答している。先述の回答数の少なさに対する推測と重複するが、漢字の読みについては意識的な努力があまりなされていないものと考えられる。

3-9. 未知の漢字への対処

前項では未知の漢字の読みをどのように推測するかについて述べたが、次に未知の漢字への対処について述べる。

未知の漢字に遭遇したときの対処について、「辞書(印刷媒体)で調べる」、「辞書(電子媒体)で調べる」、「知っていそうな人に聞く」、「インターネットで調べる」、「スマートフォンなどのアプリで調べる」、「何もしない」、「その他」の選択肢を用意し99名に対し複数回答可で回答を求めた。無回答は6である。

辞書を使うという回答数が合計で67、PCやスマートフォンを使うという回答数が合計で72とほぼ同じだったが、印刷媒体とその他電子媒体として比較すれば、予測は容易であるが印刷媒体である辞書はほとんど使用されていないことが分かる。また電子辞書の次に利用者が多いのはイ

表10 漢字の読みの覚え方

漢字の読みを覚えるのが	旁から推測して覚える			自然に覚える			その他
得意	2	2%	10%	10	11%	48%	0
比較的得意	4	4%	8%	23	25%	48%	0
あまり得意ではない	3	3%	14%	4	4%	19%	0
得意ではない	0	0%	0%	1	1%	50%	0
合計	9			38			0

インターネットというのも時代の世相を表していると言えよう。一方スマートフォンが普及している現代において、手書き入力でも検索できるアプリもあるにも関わらず辞書のアプリがほとんど使用されていないのは特筆すべきであろう。なお、書籍としての辞書を使用していると回答した者6名が電子辞書の併用、1名はインターネットとの併用と回答しており、書籍の辞書のみを使用している者はいなかった。また「何もしない」と回答した4名については、その他の選択肢を選択していないため、漢字によって異なる対応をするわけではなく本当に何もしていないようである。

次に、漢字の読みの得手不得手でどのように異なるのかを見る。読みの得手不得手で抽出し、得手不得手に対する回答がない者はここに現れてこないため、合計人数が表10よりやや少なくなっている。また表11を見ると分かるとおり「その他」を選択した者はいないので以下割愛する。

() 内の数字は表9にある数字である。「何もしない」と回答したのが漢字の読みが「得意」あるいは「比較的得意」と回答した者であることが分かる。ある程度読みの推測ができるため、わざわざ調べる必要がないということであろうか。

漢字への好悪によって対処が異なるのかをまとめたものが次の表である。() 内の数字は99名中漢字に対する好悪について回答したそれぞれの人数を表している。

以上3つの表を提示してきたが、未知の漢字への対応でそれほどの異なりは見られなかった。何もしない者はわずかで、漢字の得手不得手、あるいは好悪によらず、新しい漢字については自分で何らかのデジタルツールを使って調べていることが分かる。

4. 総括と課題

今回の調査結果は2007年に報告された国立教育政策研究所教育課程研究センター高等学校教育課程実施状況調査結果と漢文嫌いの割合が異なっている。調査時期が異なること、調査対象が現役の高校生ではなく多くが記憶で回答していること、追跡調査ではないので2007年に調査対象となった者とは異なること、大学に進学した者であることなど要因は様々であろう。しかしそれで

表11 未知の漢字への対応1

辞書(印刷媒体)で調べる	辞書(電子媒体)で調べる	知っていそうな人に聞く	インターネットで調べる	アプリで調べる	何もしない	その他
7	60	24	58	14	4	0

も漢文が嫌いと回答した数は今でも多い。月日経って記憶の中のものであっても漢文が嫌い
と回答した数は好きと回答した数を凌駕している。

内容を詳しく見ていくと国語の分野、現代文、古文、漢文のなかから好きなものを選択した場
合では、漢文を選択したものが極端に少なく古文よりも少なかった。これはセンターの「古文の
ほうが嫌い」の回答数が漢文よりわずかに多い結果とは異なった。一方漢文に焦点をあてた回答
では漢文が「好き」という回答は増えるもののそれでも「嫌い」が圧倒的に多く、いずれの回答
からも大学生になっても漢文が嫌われていることが明らかとなった。但し、若干名ではあるが学
習中に漢文に対する意識が「嫌い」から「好き」、「好き」から「嫌い」に変わったという回答が
あり、その内容を見ると教員との出会いあるいは漢字が読めるようになることによる肯定的な変
化、反対に高校に入って難易度が増したことでの否定的な変化があることが分かった。

好き嫌いは内容理解の度合いと関係しており、漢文嫌いにはその内容理解の手前の文字である
漢字と読み、漢文訓読が負の要素として関わっている。まずは漢字という文字でのつまづきを回
避したい。漢文が好きでない者には「漢文を学習する理由が分からない」、「受験のためやむなく」
といった消極的な姿勢が見られた。学習者への動機づけも考慮されるべきである。しかし教材に
対しては漢文が嫌いであると回答した者も正の意識を持っており、教材自体には魅力があること

表12 未知の漢字への対応2（得手不得手別）

漢字の読みが	辞書（印刷媒 体）で調べる	辞書（電子媒 体）で調べる	知っていそ うな人に聞く	インターネット で調べる	アプリで 調べる	何もし ない
得意 (16)	1	10	5	12	1	2
比較的得意 (66)	5	41	15	36	10	2
あまり得意ではない (6)	0	4	2	3	1	0
得意ではない (1)	0	0	1	0	1	0
合 計	6	55	23	51	13	4

表13 未知の漢字への対応3（好悪別）

漢字が	辞書（印刷媒 体）で調べる	辞書（電子媒 体）で調べる	知っていそ うな人に聞く	インターネット で調べる	アプリで 調べる	何もし ない
ずっと好き (14)	0	10	5	8	2	1
得意で好き (13)	1	8	2	7	1	1
得意ではないけれど 好き (43)	4	27	12	28	7	1
昔は嫌いだった (2)	0	0	0	1	0	0
ずっと嫌い (2)	0	0	0	1	1	0
得意ではないから嫌 い (4)	0	2	0	2	0	0
どちらでもない(17)	2	11	4	9	2	1
合 計	7	58	23	56	13	4

が分かった。

漢字に関しては、漢字の得手不得手とは関係なく漢字を好んでいる者が多かった。漢文において漢字を難しさの要因として挙げていても漢字自体は嫌っていないということである。そこで漢文嫌いの漢字の読み書きに対する得手不得手を調査すると、読むことより書くことが困難であり、漢字学習者の間で漢字を覚えるのに最も用いられている方法が「何度も書く」であるにも関わらず、「漢字が得意」な者にはその方法は適用されていないことが分かった。漢字が得意であるという回答者は、漢字の形の覚え方として「自然に覚える」、「パーツに分ける」という方法を採用している。いわゆる「正しい」書き順に則って身体が覚えるように何度も漢字を書く方法は初等教育の時から学校で採られている一般的な方法だと考えられるが、漢字習得のうえでむしろ漢字を分解して覚える、パーツを組み立てて書くという方法を採用することもさらに考慮に入れられるべきであろう⁷。また、その方法を身につけることで未知の漢字を読むときの手がかりともなるはずである。

漢字の書きとは異なり漢字の読みに自信のある者は多かったが、初めて見る漢字に対してどのような推測を行うのかを調査したところ、全体的な形から別の類似した漢字と混同しているものが多く見られ、旁から判断した者は半数しかいなかった。一画しかない漢字については手掛かりが非常に少ないことから想像力をたくましくしたものと記号に二極化した。漢字の読みの覚え方としては概して「自然に覚える」という回答者が漢字の読みの得手不得手に関係なく多く、意識的な努力はなされていないと考えられる。未知の漢字に対しては「何もしない」ものはごく少数で、他はなんらかの方法で調べている。そのなかで多かったのは「電子辞書」と「インターネット」であり、圧倒的に電子媒体を使用しているものが多いことが明らかとなった。

今回漢文が嫌いだと回答した者たちは、漢文が嫌いだという意識を引き続き持つていくことになるのだろう。しかし意識が途中で変わった回答者のように上記の負の要素を逆転するような希望もある。現在漢文を学習中の学習者たち、あるいは現在漢字を学習中で今後漢文を学習する学習者たちの漢文不人気回避は可能であると考えられる。

今後の課題は、漢文のジャンルや作品別に意識調査をすることである。今回ジャンル別に記憶している作品を協力者に挙げてもらったが、なかには作品が思い出せてもジャンルが曖昧あるいはまったく作品が思い出せないものが多くジャンルによる意識調査ができなかった。このジャンル別の意識調査をすることで人気のある教材人気のない教材あるいは苦手意識を持たせる教材などが明らかになるであろう。また漢文好きと漢文嫌いの趣向の違いがあるかどうかを調査したい。それから漢字そのものに対して嫌いであるという意識がなかったにも関わらず漢文に使用されている漢字が漢文嫌いの要素になっていたことが明らかになったことから、漢文における漢字のどの要素（文法的要素としての読みの異なり、繁体字など）が学習者にとって問題となっていたかを特定することも課題である。そして今回の結果と新学習指導要領の下で学習している生徒たちとの比較も行いたい。さらに今後非漢字圏から来日した移民子女への調査を行い、漢字学習の先に続く漢文学習が彼らにとって壁となるのか否かをはじめ、日本で教育を受けてきた子供との相違点について調査をしたい。

最後にこの調査にご協力いただいた各大学、教員、学生みなさんにこの場をかりて謝意を表す。

参考文献

マクロミル. (2011年2月28日). スマートフォンに関する調査.

参照先：http://www.macromill.com/r_data/20110228smartphone/20110228smartphone.pdf

鎌田正・米山寅太郎. (2005). 新漢語林. 大修館書店.

宮利政. (2011). 中学校の漢字・漢文をめぐる実践と課題—市立中学校での経験から—. 著：堀誠, 堀誠 (編), 漢字・漢語・漢文の教育と指導 (ページ：75-93). 新宿区：早稲田大学教育総合研究所.

向嶋茂美. (2012年5月). これからの漢文指導—新「国語総合」古典教材の工夫. 漢文教室 (198), 8. 国立教育政策研究所教育課程研究センター 研究開発部研究開発課. (2007). 平成17年度高等学校教育課程実施状況調査. 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部研究開発課.

丁秋娜. (2011). 中国における「漢文教育」の特質を探る—日本の漢文教育の改善に向けて—. 著：堀誠, 漢字・漢語・漢文の教育と指導 (ページ：182-200). 新宿区：早稲田大学教育総合研究所.

藤堂明保 (編). (1991). 学研漢和大字典. 学習研究社.

藤本陽子. (2011). 幼少期における文字習得とその環境—幼年童話と幼稚園での活動から—. 山口福祉文化大学.

文化庁. 平成23年度「国語に関する世論調査」の結果の概要. 文化庁.

林教子. (2010). 発達障害及び学習障害に対する教育支援の在り方—高等学校現場体験者としての提言—. 早稲田教育総論, 24 (1), 133-145.

- 1 研究1「古文は好きだ」という問に対して、「そう思う」8.5%、「どちらかといえばそう思う」14.6%、「どちらかといえばそう思わない」21.5%、「そう思わない」51.2%、「分からない」4.0%となっており、否定的な回答が72.7%となっている。漢文に対する否定的な回答が71.2%であるのと比較すると若干古文に対する否定的な回答が多い。
- 2 文化庁「平成23年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」でも、漢字を正確に書く力が衰えたと自覚している人の割合が13年度の41.3%から66.5%に増えたことが報告されており、日本社会全体の問題になりつつある。
- 3 宮 (2011) は中学生への調査で、「生徒が考える最も好ましい方法」が「『ひたすら書いて覚える』方法」であると報告している。
- 4 藤本 (2011) は、幼稚園では漢字は教えないものの、園児の中には見よう見まねで漢字を書き始める子どもがいると報告している。
- 5 林 (2010) は、調査のなかで「半数以上の生徒が、何度も書いて覚えるのではなく、見るだけで学習したような気になっていることがわかった。漢字を合間に覚えている生徒が多い—因はここにあると言えよう」と指摘している。
- 6 学研漢和大字典〔藤堂明保, 1991〕
- 7 同上林 (2010) で偏と旁等の部分に分けて漢字の旁を説明しながら書かせるようにしたことで効果があったことを報告している。

